

年月日

20

11 25

ページ

31

N.O.

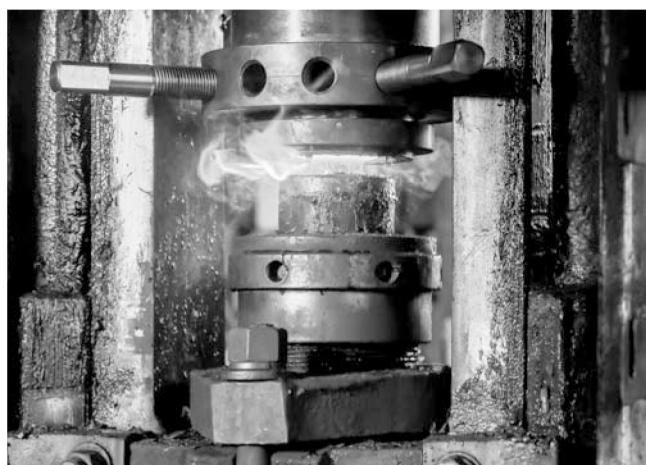
九州を代表する産業用特殊ネジメーカーのイワキ工業（北九州市小倉南区、松本俊満社長、093・471・1221）は、事業変革のまつただ中にある。後継者難のため2017年5月に隣接する戸畠製作所（北九州市小倉南区）の傘下に入り、同社から松本社長を受け入れて勘や経験が横行していた営業や製造現場へのIOT（モノのインターネット）導入を進める。経営を託された松本社長が最初に感じたことが「技術はあるが、一人ひとりの仕事の取り組みが見えない」ことだつた。見積もりに対する基準があいまいで、経験やその時の景

北九州 IoT ニューアエイズ

況感で受注価格が上下しており、類似製品でも人や時期によって金額にバラつきがある。また生産管理システムを導入していくが表計算ソフトへの再入力が必要だつたり、日报が手書きなど、無駄なアナログ作業が目立つていた。「全員が楽に仕事をするにはどうすべきか」とたどり着いたのが、工程管理のデジタル化だった。

イワキ工業

スマホ・2次元コード活用



材料の切断や鍛圧・鍛造など一連の工程をデジタル化する

鍛圧や熱処理、ネジ転と同時に、装置の稼働時間を把握することで工程の最適化にも取り組んだ。2次元コードを読み込んで5人程度の管理者で見える化した。また作業時間を標準化するは作業開始時に一度読み込んだ。2次元コードで5人程度の管理者で見える化した。また作業時間を標準化するは作業開始時に一度読み込んだ。2次元コードで5人程度の管理者で見える化した。また作業時間を標準化するは作業開始時に一度読み

現在は試用期間として5人程度の管理者で検証しており、21年初頭にも製造現場の約20人にスマートフォンを配備する。松本社長は「生産性が上がれば納期短縮や受注拡大、有給取得増加も見込め、顧客、従業員双方にメリットがある」と期待、IOT導入で當業デジタル化だった。

み取ればデータの収集・管理ができるようになり、データ蓄積で原価率を明確にし、評価や納期短縮につなげていく。

（水曜日に掲載）

工程を最適化 納期も短縮